

CHIHOUKISHI HANS NO JYUNAN

地方騎士の受難

6

AMARA
アマラ

主な登場人物 Main Characters

ナナナ

新たにトリップして来た7人目の日本人。
様々な便利アイテムがポイントで買える
不思議なカタログを持つ。???出身。

イツカ

五人目の日本人。
ダンジョンマスターとして
無生物にあらゆる機能を
付与できる。
酒豪。鳥取県出身。

ムツキ

六人目の日本人。
火・水・風・土の四つの
魔法を操る、
ちょっとオタクな
お騒がせ魔法少女。
埼玉県出身。

ハンス

本編の主人公。
都では「魔術師殺し」の異名を
誇る凄腕騎士団長だったが、
貴族間での政争に背を向け、
自ら辺境の地方騎士に志願する。

コウシロウ

四人目の日本人。
元極道にして
千里眼の
能力を持つ料理人。
静岡県出身。

ケンイチ

一人目の日本人。
農業高校出身で、凶悪な
魔獣を手懐ける能力を持つ、
粋なボンパードル男。
北海道出身。

ミツバ

三人目の日本人。
外見は可愛い美少女だが、
大食い&怪力が自慢の
トラブルメーカー。島根県出身。

レイン

ハンスを異常なまでに慕う
元部下の女騎士。普段は
仮面のような無表情だが、
実際は感情の浮き沈みが
激しい。

キョウジ

二人目の日本人。
オタクで気弱な
性格の高校生だが、
どんな怪我でも
回復させる魔法が使える。
東京都出身。

1 推論を立てる男達

よく晴れた、ある日の午後――。

ロックハンマー侯爵領主館の近くの起伏に富んだ森の中。

その森の切り拓かれた一角に、周りの自然とはそぐわない光景が広がっていた。

豪華なガーデンテーブルが設置され、その上には色とりどりの菓子が並ぶ。周りには給仕をする執事が数名控えており、少し離れたところには兵士の姿もある。テーブルについて紅茶を嗜んでいるのは、巨漢の男と、革と金属で作られた鎧のようなもので全身を包んだ男。

片方は、ロックハンマー侯爵。

もう片方は、コウシロウである。

この日、コウシロウはロックハンマー侯爵に呼ばれ、ようやく完成した狙撃銃のお披露目をしてきた。キョウジが特別に発注して作らせたその狙撃銃は、直径約三十ミリメートルの弾丸を撃ち出す。銃というより、砲といった方がいいかも知れない。射程も長く、正確性も高いものの、その分反動が大きすぎて、並の人間には使えない化け物になってしまった。

そこで、銃を扱うためにキョウジがイッカに作らせたのが、コウシロウが身に着けているもの

だった。

ゴーレムコアを背負ったそれは、鎧型のゴーレムという変わり種だ。このゴーレムは着用者の動きをサポートする一種のパワードスーツで、スーツそのものの有する高い防御力と、着用者の動きを邪魔せずに強化する能力を持っていた。これをセットにして使うことで、コウシロウは件の狙撃銃を扱えるのだ。

ちなみに、性能の披露はすでに終わっている。

千メートル以上離れた的に、一発で命中。

この結果にはロックハンマー侯爵も、大いに満足した様子だ。

「そういえば、そろそろ息子も見学している頃だと思っただがね」

紅茶を口に含んだロックハンマー侯爵は、ふと思いついたように言う。

この日、ハンス達の住む街にはロックハンマー侯爵の次男が視察に訪れていた。目的は、街にある装備の確認だ。オークやゴブリンからなる自衛隊、そして、イツカが作ったゴーレム。諸々の戦力を確かめるため、演習が行われているのである。

「次男は、騎士の称号を得ていてね。領地でも将の立場にある。『にほんじん』のことは知ってはいるのだが、実際に目にしたことがないからね。良い機会だと思っただがね」

「ああ、そうでしたか。キョウジ君が苦悶の表情で準備していましたからねえ。きつと、参考になるでしょう」

コウシロウは嬉しそうに笑う。演習で披露される内容は、コウシロウも聞いていた。

巨大な砲塔を背負い、「砲弾を作り出す」トラップと「爆発を起こす」トラップを使った砲撃を得意とするゴーレム「ビッグフット」と、金属製の強靱な体と、絶大な力強さを誇る接近戦用ゴーレム「グレンデル」。

この二種のゴーレムを、内部に転移トラップを仕掛けた移動式拠点「鳥カゴ」を用いることで、瞬時に展開する。これにより、どんな場所にも瞬く間に攻撃陣地を築くことが可能となる。

キョウジが考案して資材を用意し、イツカが能力を使って完成させたものである。実戦に出たところそないが、その完成度はかなり高い。

コウシロウに釣られたのか、ロックハンマー侯爵も笑いを漏らす。

「あの治療師先生はなかなか苦勞性だからね。またぞろ胃に穴でも空けそうだと思うのだがね。もつとも、自分で治療できるのだろうけれどね？」

肩を竦めて見せるロックハンマー侯爵に、コウシロウは声を上げて笑う。

ひとしきり談笑したところで、「さて」と、ロックハンマー侯爵が切り出した。

「君のことだからすでに分かっていると思うが、この場には君以外にも客人が来ていてね。君にとっては、懐かしい顔だと思っただが」

懐かしい顔。

確かに、コウシロウにとっては随分懐かしい人物である。

千里眼という能力を持つてこの方、コウシロウは常に周囲に視界を広げる癖がついていた。元々身の回りを警戒する癖はあったのだが、最近はそれに拍車がかかっている。そのため、ロックハンマー侯爵が言うとおりで、すでにその客人と思われる人物は見つけていた。

「ええ。お変わりないよう。お元氣そうで、何よりですなえ」

「お変わりないってなあ、随分だな。あのときよりもいい男じゃない？ こざっぱりして」突然響いてきた第三者の声だったが、コウシロウもロックハンマー侯爵も驚く様子はない。

どちらも、どこか楽しげな表情だ。

近くのやぶの中から現れたその人物は、テーブルへ近づいて来る。

いつの間にか用意されていた三つ目の椅子にどっかりと腰を下ろし、大きく息を吐いた。

「本場にサプライズのしようがねえなあ。確か、遠目だったが一回は直接顔を合わせたことあったかな？ 俺は、セルジュ・スライプス。一応、初めまして」

「はい、初めまして。フジタ・コウシロウと申します。今日は、盗賊のお衣裳ではないんですねえ」

「いやあ、なにね。いろいろありましてね？ 盗賊団の頭から、今度は傭兵団の頭ですわ。いずれにせよ、この不況のご時勢に仕事にありつけるなんざ、ありがたい限りで」

「なにしろ彼らは隣国の軍事施設から魔獣を盗み出すほどの凄腕だからね。味方になってもらった方が有益だと思ったのだよ。敵の敵は味方。という言葉もあるからね」

肩を竦めるロックハンマー侯爵の仕草に、コウシロウとセルジュは笑い声を上げる。

コウシロウがセルジュの存在に気がついたのは、数日前であった。領主館に呼ばれていたので、事前調査をしようと千里眼を使ったときのことだ。

セルジュは、当人の言ったとおりで髭を剃り、髪の毛を撫で付けて、こざっぱりした衣服を着ていた。盗賊のときの姿からすれば別人にも見える。

だが、その程度で千里眼の力を持つコウシロウが誰だか分からなくなることはない。人の顔を見分けるのは「商売」の基本でもあったし、何より何日も見張り続けた相手の顔なのだ。

見間違えるはずがないのである。

暫く様子を見てみると、領主館に出入りし、仕事をしているらしいことが分かった。

ああ、やっとか。

というのが、コウシロウが最初に抱いた感想だ。別に、驚きとか意外に思う感情はなかった。

なにしろ、コウシロウは今までの経緯を知っていたし、その目で見ているのだ。セルジュがロックハンマー侯爵の下に来ることは予測が付いていたし、楽しみでもあった。コウシロウ自身、セルジュ・スライプスという男をプロとして認めていたからだ。

「さて、諸君。私はどうも、回りくどいのが苦手ですね。単刀直入に話をしようと思う。君達に来てもらったのは、隣国に関する事なのだがね」

コウシロウは、銃の腕前を見せる、という名目で呼び出されていた。だが、セルジュが領主館に居るのだ。用件はそれだけではないだろう。

もう一つの「用件」の内容についても、ある程度予測ができる。だから、コウシロウはここに来る前、自分が持ちえる「隣国の日本人」に関する情報を、すべて頭に叩き込んでいた。

それはナナナから聞いたものに限らず、キョウジ達が立てた「相手の能力の予想」といったもので。

大半の情報はロックハンマー侯爵に伝えてあった。それでも、実際に見聞きした人間の話が重要になることもある。

だからこそ、ロックハンマー侯爵もコウシロウを呼び出したのだろう。

それは、セルジュについても同じはずである。

「今まで断片的にしか情報が得られなかったが、ここに来てようやく、それぞれに違う情報を持つ人間を集めることができた。断片的な情報でも、それなりの量を集めれば実情に近づくこと、あるいはそこに接近する手がかりにはなるはずだ。そこでこれからそれらの情報の擦り合わせ、確認をしようと思うのだが。問題はないかね？」

コウシロウもセルジュも、ごく短く了承の返事をする。

ロックハンマー侯爵は満足そうに頷き、思い出したというように手を叩いた。

「そうそう。すまないとは思ったが、話を早く進めるためにスライプ君には君達『にほんじん』のことを説明させて貰ったよ。もちろん、能力のことにしてもね」

「あの森の中で起こったことに、よーやつと得心がいったよ。魔獣使い、治療魔法、化け物、千里

眼。でもって、魔術師殺しときた。そりゃ敵わないわけだわ」

大げさな仕草で溜め息を吐くセルジュに、コウシロウは苦笑を漏らす。

セルジュの言うとおりに、あまりにも差のある勝負だった。もし自分が、あのとときのセルジュの立場だったら。

そんな想像を、コウシロウは何度かしたことがある。出る結論はいつも、「自分ならあそこまで上手くは立ち回れない」というものだ。千里眼という能力で、常に彼らを見張っていたからこそ分かる。コウシロウはセルジュという男を、高く評価しているのだ。

「いえ。構いませんよ。私自身、どう説明していいのか未だに困りますからねえ。むしろ、助かりました」

ロックハンマー侯爵は頷いた。そして片手を上げて、執事に紅茶のおかわりを用意させる。喉を潤すようにそれに口を付けると、ほっと溜め息を吐いた。

「では、早速で悪いが、始めようと思うのだがね」

コウシロウとセルジュは、どちらも無言で頷く。

さて、この話し合いの結論を聞いたら、あの二人はどう思うだろう。

頭を抱えるハンスとキョウジの姿を想像して、コウシロウは僅かに笑みを濃くするのであった。

「さて。では、最初に、ある人物についての認識を共有しておきたい。今隣国で起こっていること

の、中心になっていると思われる人物だ。名前は、ファヌルス・リアブリュック」

ロックハンマー侯爵の口からその名前が出たとたん、セルジュはすっと目を細めた。

コウシロウの方も、表情から笑みが失われる。

「まず、隣国の侯爵である私にでも手に入る情報からだ。生まれたのは、ごく普通の開拓村。幼少期、高い能力を買われ、子供の居なかつたリアブリュック公爵家へ養子として引き取られた」

優秀な子供を、貴族が養子として引き取る。これ自体は、さして珍しくはない。個人の能力差が激しいこの世界では、頻繁に行われていることだ。

「一体どんな能力を評価されたかは、よく分からなかつた。学業や領地運営なども巧みだったが、正直なところ彼程度の手腕の人間なら居ないことはない。事実、彼は現在外交関係や重要な決定以外、すべて側近に任せているそうだよ。ならば魔法が優れているのか、と思つて調べてみたのだが、どうも隠蔽されているようだね」

強力な魔法というのは、兵器と同じ扱いになる。それ自体が国家機密とされることもあるので、いくら隣の国のこととはいえ、そう簡単には調べがつかないのだ。

だが、調べがつかないということはすなわち凄まじい能力を保有しているということを示唆してもいる。

「その魔法については、俺が」

そう言つて手を挙げたのは、セルジュだつた。

ロックハンマー侯爵は頷いて続きを促す。

「侯爵閣下がお察しのとおり、あいつが養子に選ばれた最大の理由は魔法だ。内容は魔獣を従えることができる、つてものでね。しかも手懐けた魔獣は、あいつ以外の言うことも聞くようになるんだつてさ」

「ということとは、まさかセルジュさんの部隊が連れていた魔獣は、その能力で？」

僅かに表情を険しくするコウシロウに、セルジュは大仰に頷いて見せる。

「そ。我が国がやつとの思いで手に入れた魔獣を操つていたのは、たつた一人の魔法使いによるものでした。つてオチよ」

セルジュは芝居がかった仕草で肩を竦めた。

隣国から魔獣を盗み出した盗賊団が、ハンス達の街を目指してやつて来る。随分前に、そんな事件があつた。その実情は、隣国が新しい技術で手懐けた魔獣を実戦投入する実験であつたのだ。

盗賊云々というのは、表向きの偽装である。その実験部隊を任されていたのがセルジュだつた。だから、セルジュはファヌルスの魔法についても、ある程度情報を与えられていた。

「ていうか、無茶苦茶な話よ？ 実際、遠話とかみたいに少ないながらも使えるやつが複数いる魔法ならまだしもさ。あの坊ちゃんしか使えない魔法を頼りにするとか。やつが死んだらどうするつもりよ、つてね」

確かに、たつた一人の人間しか使えない能力を、軍隊のような公の組織で用いるのはかなりり

スクが伴う。

それが「技術」であれば、まだ別の人間に伝えるなりして維持していくことが可能だ。

だが、一個人が持つ能力となると話は別である。恒久的に安定したものを求める軍隊のような場所では使えないはずがない。

「それこそ、あの坊ちゃんが自分の裁量で、自分の領地でやるってならまだしもよ？ 天下国家が後押ししてやるってのはどういうことなのか、って、俺は思ったね。まあ、そういう前例がなくなるから、絶対におかしいとは言いつれぬわけだけれども」

魔獣を従えるのは、国にとつて大きな切り札になりえる。少しでも可能性があるなら、研究をしたいというのでも分らないではない。実際、その技術を得るために様々な実験を繰り返している国は、一つや二つではないのだ。

そこで、コウシロウはふとキョウジとイツカの顔を思い出した。キョウジが作らせた銃や強化服、ゴーレムなどは、イツカの能力があつてこそその産物だ。そういう意味では、ファヌルスの能力を前提とした隣国の魔獣事情と同じと言えるだろう。

なにしろどちらも、それを使いこなせる人間が一人しか居ないのだ。

両者の大きな違いは、片方が国家事業であることと、もう片方が、あくまで個人レベルのものであることだろう。

趣味というにはいささか過剰戦力だが、国の戦力として組み込まれているわけではない。ロッ

クハンマー侯爵のお許しも出ているので、犯罪ということでもない。

何とも奇妙な状況ではある。だが、面白くていいじゃないか。

そんな風にコウシロウは思った。コウシロウにとつてこの世界での生活は第二の人生である。今までのしがらみから解放され、魔法すらある世界にやつて来たのだ。理に適わないことを楽しんでついでいいだろう。

「ああ、ごめんなさいね。脱線しちゃって。まあ、それは置いておくとして。とにかく、ファヌルス・リアブリュックの魔法は、魔獣を従えることができるもの、つてことになつてる」

「なっている。ということは、君はそう思っていないということかね？」

「それにしても、妙なことが多すぎるもんで」

頷きながら、セルジュはロックハンマー侯爵の言葉を肯定する。

「妙なこと、かね？」

「ええ。あの坊ちゃんと会つた人間はですね。全部が全部、あれの味方になるんですよ」

セルジュの言葉に、ロックハンマー侯爵は不思議そうに片眉を上げた。

どう説明したものかと悩むような仕草を見せてから、セルジュは「たとえは」と言葉を続ける。

「リアブリュック公爵領には、魔石鉱山があるんですがね？ あるときコレに目をつけた大商會が、権利を買おうとしたんですよ。と言つても、あまり評判のよくないところで。いろいろやましいマネをして買い上げようとしたらしいんですわ。で、件のお坊ちゃんは、話し合いに行くと言つて本

店に乗り込んで行つたんです」

いくら力のある商会とはいえ、貴族が訪ねて来たからには無下にもできない。まして相手は公爵家である。当然のように商会の会長が対応したのだという。

「で、暫く一緒にお茶をして店を出る頃には、すっかり和解してたんだそうです。それどころか、ヤツのお抱えみたいたになったそうではね？ 道具の調達から、領地で生産されたものの売り買い、公爵家の資産運用から武器の調達に、果ては災害があったときの寄付やら援助まで。完全にパトロンつてやつですわな。あの領地では昔から魔法道具の生産が盛んだったんですがね？ ファヌルスが商会を味方につけてから、一気にその規模も広がったんですよ」

「なるほど。それは、面白い話だと思っただがね」

「もちろん、それだけじゃありません。ヤツのことを気に食わない貴族に、舞踏会に招待されたとき。別の貴族に、王都の別邸に呼ばれたとき。王城のサロンで、坊ちゃんのことを潰そうとしている派閥に囲まれたとき。そのせーんぶが、ヤツの『味方』に変わっちゃまったんですよ。ヤツを暗殺しようつて連中も居たようですが、仕舞いには暗殺者どころか組織ごと味方にしちゃったわけですわ」

ロックハンマー侯爵は腕を組むと、考えるように唸り声を上げる。

人誑しとでも言うような、どんな人間とも和解できる人物は、歴史上幾つか例があった。だが、セルジユはおそらく、そういう非凡な才能をファヌルスが持っている、と言いたいのではないだ

ろう。確かに薄気味の悪さ、得体の知れなさを感じる話である。今ここで嘘をつく理由がない以上、セルジユが言うことは事実なのだろう。

諜報のような「仕事」に長けた男が調べてきた情報である。少なくともロックハンマー侯爵とコウシロウは、その話をすべて事実として受け入れた。

「これは、あくまで憶測ですが。ヤツは接触した人間に対して、何らかの精神的介入、たとえば、ある種の洗脳のような魔法を使っているのではないかと、まあ、俺はそう考えたわけでした」

言い回しこそ軽いものの、セルジユの表情はごくごく真剣なものだった。洗脳魔法というのは、歴史上存在しなかったわけではない。もつともそれは、「魔王」とか「勇者」といった、お伽噺になっっているような伝説的な存在が活躍していた大昔の代物だ。すでに地上から消え去った、失われた類の魔法なのである。

コウシロウは、ちらりとロックハンマー侯爵に目を向けた。すぐにそれに気がついたロックハンマー侯爵は、無言で首を横に振る。

これは今からコウシロウが話そうとしている内容を、セルジユにはしてあるのか、という確認だった。その内容とは、ナナナからもたらされた情報である。

「そのあたりに関しては、私も面白い話を知っています。そのファヌルス・リアブリュックとかいう坊やは、私と同郷の人物なのだそうですよ」

「同郷？ つまり、『にほんじん』だと？ いや、しかし……」

驚きを隠せないといった様子 of セルジュを、コウシロウは苦笑しながら両手で宥める。

怪訝な表情のセルジュに、コウシロウは説明を続けた。

「正確には、生まれ変わる以前、同郷の人間だった、ということでしょうか。彼は、生まれる前の記憶、転生前の記憶を、持っているらしいのですよ」

「その記憶によると、ヤツはコウシロウ殿達と同じ世界の人間だった。と？」

セルジュの問いに、コウシロウは大きく頷く。

セルジュは、なんとも言えない顔で大きく息を吐き出す。

ロックハンマー侯爵はそんなセルジュを見て、紅茶で唇を濡らせてから口を開いた。

「実は、この情報は彼と実際に会った人物、コウシロウ殿と同じ、『にほんじん』から得た情報でね」

「『にほんじん』の？ ヤツが集めていた『にほんじん』の一人ですか！」

にわかセルジュが血相を変えた。しかし大声を出してから、セルジュははっとした顔を作る。

ぱつが悪そうに頭を掻きながら、腰を下ろす。

「いや。実は、ファヌルスが『にほんじん』という連中を抱えているのは、俺も独自に掴んでまわしてね。尋常じゃなく強力な魔法の使い手だっというのは分かっていたんですが。今回、『にほんじん』に関する資料を侯爵閣下からいただいて、ようやく得心がいったところだったんですよ」

ファヌルスは、かなり大々的に国内の日本人を探していたらしい。

セルジュもこれを知り、情報を集めていたようだ。

「先日のことなのだが、隣国近くの海上に巨大な施設が現れてね。その調査を行ったところ、ファヌルス・リアブリュックと関係があるという『にほんじん』の捕縛に成功したのだよ。まあ、この件に関しては後で資料を渡そう。それより今問題なのは、その『にほんじん』についてだと思っただがね」

「ですな。しかし、なんというか。やつが集めた『にほんじん』は、ほとんどがあの坊ちゃんのことを崇拜しているような状態だと聞いていますが」

「捕縛した『にほんじん』、ナナナ、という名なのだがね、その人物も、そのようなことを言っていたよ」

そこで、唐突にコウシロウが二人を手で制した。

常になんそんな仕草に、ロックハンマー侯爵は目を丸くする。だが、何も言わず口を嚙む。余程のことがない限り、コウシロウはこういったことをする男ではないと思っっているからだ。

コウシロウは、頭の中を整理するように、目を瞑りながら口を開いた。

「ナナナさんは、自身の能力を使って状態異常に対する強い耐性を得ています。毒、マヒ、それから魅了というような精神的な干渉に対するものまで。その能力については、すでにキョウジくんが『カルテ』で確認を取っています。その、そのナナナさんが、ファヌルスと会ったときに『不気味なものを感じた』と言っていたんですよ。あくまで仮説ですが、ファヌルスによる何らかの精神干

渉を弾き返したとき、違和感を覚えたのではないでしょうか」

「ふむ。つまりナナナくんがその不気味なものを感じたことこそが、ファヌルス・リアブリュックが精神的干渉のような能力を持つている証拠ではないか、ということかね？」

ロックハンマー侯爵に問われ、コウシロウは神妙に頷く。そして、すぐに申し訳なさそうに苦笑しながら、頭を掻く。

「ああ、いえ。申し訳ありません。ただ、なんとなくそんな恐れもあるのではないか、と思っただけなんですけどねえ」

「いや、俺にはあながち、間違つてるとも思えねえなあ」

顎に手をあて、セルジュが唸った。

「調べた限り、あの坊やの『味方』になったヤツらは、悉くアイツに不利なことはしない。まるで敬虔な信者みたいな有様になつてる。それが、その、ナナナとかいう『にほんじん』は、あの坊ちゃんによろしくない感情を抱いた、と言つたわけだ。ほかには何か言つてなかつたのか？」

「ええ。彼らに関する情報を大分いただきましたよ。自発的に、ご自分の口から」

「そんなことすりゃ、ヤツの不利になるって分からねえはずがない。つまり少なくともその点において、すでにそのナナナという人物は、あの坊ちゃんの『味方』とは違つてこと、か」

暫く話を聞いていたロックハンマー侯爵も、唸りながら口を開く。

「よしんばナナナくんが何らかの意図を持って、ファヌルス・リアブリュックの『味方』ではない

と偽装していたとしても。彼の前世が『にほんじん』だ、というような嘘を吐く意味はないだろうと思うのだがね」

「まあ、とにかく。その言葉を信じるとすれば、ファヌルスの坊ちゃんも前世が『にほんじん』で、だから伝説に出て来るような魔法を使えてもおかしくない、と。それこそ、精神に干渉するような魔法が使えるなんてことも、ないではない。もちろん、そういう恐れもある、つて前提の話として」

セルジュとロックハンマー侯爵は渋面を作る。今しがた出た仮定説が真実なら、合点がいくことが多かったからだ。

「先日来、にわかには隣国で休戦協定に納得できないという気風が強まっている様子だね。その中心になつている派閥は、特にファヌルス・リアブリュックと繋がり強い者達ということだ。王族から一般庶民まで、様々な立場の者達だそうだね。共通点がファヌルス・リアブリュックにしか見つからないそうだ」

「まさしく、ファヌルスと接触したということが唯一の共通点かもしれない。勝ち目のない戦争に突っ込んでいくようなことだつてやりかねえってか、クソ」

隣国との戦争が終わつて、暫くが経つ。不平等な終戦協定を結び、隣国はかなりの苦汁を舐めさせられている。

つまり、それに対する恨みをつのらせ、再び戦争へ突入――。

という事態に発展したとしても、おかしい話ではない。

「もちろん、たとえばですが」

そう断りを入れてから、コウシロウは口を開く。

「たとえばそのファヌルス坊やが、何らかの形で日本人の能力を戦争で使おうとしていたら、どうでしょう。小さな片田舎の街で、私達のようなことができるんです。それを、国家レベルで後押ししたとしたら。どうでしょう」

ハンス達が暮らす小さな田舎街。

ケンイチ達は、その中でしか動いていなかった。物資や援助といったものも特に受けず、自分達で牧場を作り、ダンジョンを作り、ゴーレムを作り、銃を作り、現在の環境と戦力を整えた。

ロックハンマー侯爵は、彼らがすることを黙認こそしても、物資の提供などはしていない。そういったことをしなくても、彼らは勝手にあれだけのものを作り上げたのだ。

もしそれが、国家が後押しして戦力を整えさせるようなことをすれば、一体どれだけの物を生み出せるのだろうか。

直接見ていないだけに、セルジュは判然としない顔であった。

だが、ロックハンマー侯爵は表情を陰しくする。

「不確定な要素が多い。それが正しいかどうか分からない。が。どうにも私は、調べてみる価値はあるように思うのだがね」

ロックハンマー侯爵が言うとおりに、これはあくまで仮定の話だ。話を飛躍させすぎだ、と言う者も居るだろう。だが、ロックハンマー侯爵は、馬鹿げていると笑い飛ばせなかった。

「しかし、調べてみようもない、か。それこそ近づいただけでどうにかされるかも知れないってんなら。密偵も何も意味がねえ」

セルジュは毒づく。

「仮定」通りの能力をファヌルスが持っていたとしたら、密偵などを送り込んだり情報を収集したりする行為は危険ではない。なにしろ当人はもちろん、その周囲を調べることすら危ういのだ。

「調べる気になれば、それなりに方法はあるものですよ。たとえば、よく観察してみる、とかですかねえ」

コウシロウは自分の目元を指先でトントンと突いた。

セルジュはそれを見て、大げさな仕草で手を叩く。

ロックハンマー侯爵は腕を組み、「ふむ」と僅かに考えるように呟いた。

「すまないが、頼めるかね。君達には、直接関わりのないことだとは思っただがね」

確かに、現状コウシロウ達には関係のない話だと言えるだろう。国同士の戦争については多少影響はあるかも知れないが、実際に彼らが戦争に関わるようなことはない。

ファヌルスにしても、こちらのことを知っているとは限らない。むしろ、知らない可能性の方が高い。となると、コウシロウにとってファヌルスのことは対岸の火事、と言ってもいい。

だが。

「いえ。これは、勘なんですけれどね？ どうもファヌルスという坊やのことといい、戦争のことといい。なにか、私達に関わりが出て来るような気がするんですよ。ただの勘、なんですけれどねえ」

コレが、意外にあたるんですよ。

そう言いながら、コウシロウはにこにここと、いつもの笑みを浮かべるのであった。

2 島へ向かう男

ハンスの国との戦争に大敗した隣国は、非常に厳しい状況に立たされていた。

戦後結ばれた条約は、そのどれもが隣国にとって不利益なものばかり。輸出入の規制は言うに及ばず、関税、治外法権、ほかに様々なものがある。

中には、隣国が特産としている魔法道具に関するものまであった。製作に特殊な技術と材料を必要とする魔法道具は、隣国の主要産業の一つでもある。その生産や販売先、輸出の規制。

魔法道具は、生産技術を持つ国に限られている。小国である隣国が、ハンス達の住む大国相手に戦争ができたのも、そこから来る技術差や資金力によるものだった。それを抑えつけられるのは、

首に縄をかけられているのに等しい。

隣国が負わされたのは、当然それら不平等な内容の条約だけではない。戦後賠償も莫大であり、支払いも現在も終わっていない。いくら敗戦国とはいえ、隣国の状況はあまりにも酷いものだった。通常なら、ここまで一方的な扱いは受けないだろう。

何故、このような状況になってしまったのか。

実はその責任の一端は、ハンスにある、とも言えた。

先の戦は、良くも悪くも政治的、外交的なものであった。お互いの国に譲れない主張があり、その軋轢を解消する方法として、戦争という手段が選ばれたのだ。どちらに非や正義があったかを問えるような、そういう種類のものではなかった。

建前は別にしても、お互いの同意のもと、それぞれの利益のために行われたものだった。

こういった戦争は、珍しいものではない。少なくともハンス達が暮らす国と、その周辺の国々では、当たり前に行われているものだ。

戦争とは、外交上の物事を決定するための外交手段の一つ。

良くも悪くも、それがハンス達の暮らす国々周辺での「戦争」だった。

隣国とハンス達の国の戦争も、表面上はともかくとして、それ以上でも以下でもない。元来あの戦争は、お互いにほどほどの戦果を上げて収まるはずだったのである。直接戦っていた人間達の思いはどうであったとしても、それを後ろから操る者達の認識は間違いなくそうだったのだ。



実に面倒な話だが、戦争の主導権とは直接戦う者達ではなく、安全な場所から指示だけしている者達に握られるものなのである。

しかし戦争は、予定を逸脱した形で終結を迎えることとなった。一人の「騎士」が率いる「騎士団」が、突出した武勲を立て続けに上げたからだ。

この騎士というのが、魔術師殺し、ハンス・スエラーである。

大国であるハンス達の国が順当に勝利し、隣国も大いに善戦した結果、隣国には不利なもの、ひとまず平等に近い条約を結ぶ――。

そんな予定は大きく崩れ去り、蓋を開けてみれば、隣国の圧倒的な敗北。

それに見合う一方的な代償を支払うという、隣国にとって最悪な状況になってしまった。

ハンス達の国には、願ってもない僥倖だった。

隣国にしてみれば正に悪夢だ。しかし条約、賠償金などの物質的なもの以外にも、もっと厄介な問題があった。

それは戦争をするために煽ってきた、国民感情である。

開戦前、隣国は国民の意思を戦争へ向かわせるため、様々な政治的宣伝をした。ハンス達の国と戦い、打ち倒すことこそが正義であり、そのために国民一丸となって戦うのだ。

そんな声が国民の大半を占めるように、様々な工作を行った。

幸か不幸か、それは見事に成功し、隣国の多くの国民は戦争を是とし、ハンス達の国との戦争へ

と突入したのだ。

ところが想定外の歴史的敗北は、抑圧してきた国民感情の不满を膨れ上がらせることになった。国内は大いに荒れ、貴族や王族間の統制も失われてしまった。

そして、大国であるハンス達の国の貴族達は、そういった状況でこそ本領を發揮した。隣国の国民感情を巧にかき乱しつつ、貴族や王族を懐柔して利益を搾り取り、国力を殺いでいったのだ。

何故、こんな事態になってしまったのか。

一体誰の、何のせいなのか。

隣国の民の間でその話題が上がったとき、必ず出るのが「ハンス・スエラー」の名前であった。

戦争での大敗と、自分達が苦境に立たされている原因は、「魔術師殺し」にこそあるのだと。

それだけとは言えないが、確かに原因の一つには間違いないだろう。

要するに隣国は現在、ハンス達の国による圧力と国民の強い不満という二つの要因が重なり、厳しい立場にあるのだ。

もはやこの状況を脱するには、もう一度戦争をするしかない。

そんな意見を言う者もいた。

もつともそうなった場合、隣国が勝つ見込みは一切なかった。つまるところ、現在の状態を解消するには滅びるしかない、というのだ。しかし「その方がましだ」と賛同する声すら上がり始めていた。

現在の隣国は、それほど混迷を極めた状態になっているのであった。

ロックハンマー侯爵、コウシロウ、セルジュの三人が会っていたのと同じ頃。

窓の外を眺めながら、ファヌルスは楽しみに鼻歌を唄っていた。

ここはリアブリュック家が所有する城にある、彼の自室である。

その窓からは、城下の街の様子が一望できた。一面に広がる屋根と、その間を走る網目のような道。民家や工房、屋台や行きかう馬車。忙しそうに歩いて行く沢山の人々。時折吹いて来る風に乗って、喧噪も聞こえて来る。

ファヌルスは目を細め、愛でるように、うっとりとその風景を眺めていた。

だがその窓からは、一つだけ異質なものが見えていた。

それは、巨大な岩山。

あるいは、小さな島のような島。

それだけならば、単なる自然物だろう。だが問題なのはそれが、空中に浮いているという点だ。ファヌルスの居る城から見ると、街を挟んだ向こうに浮かぶそれは、数カ月前まではなかったものである。

ファヌルスは窓へ近づき、そっとガラスに手を当てた。それから嬉しくてたまらないといった様子で笑い声を漏らす。

そのとき、ドアを叩く音が響いた。彼は不思議そうに首を傾げると、ドアの方を振り向く。「どうか、したのかな？」

「ファヌルス様。そろそろ、『島』へいらっしやるお時間ですが」
城に仕えているメイドの声だった。

ファヌルスは一瞬考えるように首を捻り、すぐにぼんと手を叩く。

「ああ、そうだね。すっかり忘れていたよ。ありがとう、すぐに準備をするよ」

「分かりました。お待ちしております」

そう言葉が返って来ると、ドアの前から足音が遠ざかっていく。

普通、メイドが主人に用件があるときは、部屋の中に入ってから用件を述べるものだろう。しかし、ファヌルスは一人で部屋に居るとき、他人が入って来ることを嫌った。だからメイドは、ドアの外から声をかけたのである。貴族としては珍しいことだろうが、こればかりは仕方がない。

それ以外にも、この部屋に入らない方がいい理由があった。

見てはならないものを見た、などという理由でメイドを死なせるのは、ファヌルスの本意ではない。

ファヌルスは窓から離れると、出かける準備を始めた。といっても、コートを羽織る程度のものだ。外出は決まっていたので、すでに着替えは済ませてあった。

コート掛けから上着を持ち上げ、小脇に抱える。そのままドアの方へ歩こうとして、ファヌルス

はふと足を止めた。再び窓の外を見て、宙に浮かぶ巨大な岩山を眺め、微笑む。

そして、再び鼻歌を歌い始める。

窓の外を眺めていたときと同じ旋律を刻みながら、ファヌルスはすこぶる機嫌よく、ドアを開けるのであった。

ファヌルスが城の表玄関を出ると、移動用の馬車が待っていた。その前に立つのは、利発そうな黒髪の少女。ファヌルスに保護された日本人の一人、イチゴという名の少女であった。

イチゴはファヌルスの姿を見て、笑顔で手を振る。

「ファヌルスー！ あ、そっか。ファヌルス様、だった！」

しまったという顔をするイチゴに、ファヌルスは微笑む。

「呼び捨てで構わないよ。気にするような人間は、この場には居ないしね」

「ファヌルスが、えっと、サマがそう言っても、トヨカちゃんが怒るんだもんー」

唇を尖らせるイチゴに、ファヌルスは楽しそうに笑い声を上げた。

そんなファヌルスに釣られたのか、イチゴも笑い始める。

イチゴは、いわゆる転移者であった。

普通に暮らしていたはずなのに、気がついたら森の中を歩いていた。混乱して彷徨っていると、小さな村に出る。そこでお世話になっていたところ、うわさを聞きつけたファヌルスがやって来た

のだ。戸惑^{とまど}って支離滅裂^{しりめつれつ}になるイチゴの話を、ファヌルスは辛抱強く聞き続けた。

そして話の内容から、イチゴは別の世界から迷い込んで来たのだらうと結論付けたのである。

驚いているイチゴに、ファヌルスは自分の秘密を打ち明けた。自分も、生まれる前は日本人であり、いわゆる転生者である、と。結局、イチゴはファヌルスに保護されることとなった。

まったく知らない場所で、自分を助けてくれた。それも、故郷を同じくする人物。

イチゴにとってファヌルスが特別な存在になったのは、当然のことだろう。

「なら、気にしなくてもいいさ。トヨカは今、島に居るんだらう？」

「そうなんだけどー。ずっと呼び捨てだったから、慣れておかないと」

「呼び捨てでもいいと思うんだけどね。それこそ、ずっとそうだったんだから」

肩を竦めるファヌルスを見て、イチゴはにっこりと微笑む。

イチゴは、ファヌルスがこの世界で最初に会った日本人だ。ほかの日本人が現れるまでの間、

イチゴと同じ立場の者は居なかった。イチゴがファヌルスに親しげに接しようと、呼び捨てにしようと、誰にも咎^{とが}められなかったのである。

二人だけの期間は数カ月程度だったが、イチゴにとっては、大切な思い出だった。

「そういうえば、どうしてわざわざこっちに来たんだい？」

「だって、ほら！ 私が居た方が速いと思ってる！」

イチゴは両手を大きく開いて見せた。その掌^{ひら}は、淡い燐光^{りんこう}を放っている。それは、イチゴが魔

法を使える証拠であった。

この世界に転移して来た日本人は、そのすべてが特殊な能力を持っている。イチゴのそれは、様々なものを強化できる「強化魔法」だ。

それを使えば、馬は通常よりも何倍も速く走ることができ、馬車の車輪も滑らかに回るようになる。つまりイチゴは、自分の能力を使って素早く移動をしようとしたいらしい。

ファヌルスは目を大きく見開くと、どこか楽しそうに苦笑する。

「イチゴ。そんなに速く走れないよ？ 街の中では徐行運転^{じょこう}、だらう？」

「あ、そうだった！」

人通りの多い街の中では、馬車や馬はすぐ止まれる速度で走らなければならない。それは、この国の法律の一つだ。

イチゴは「そうだった！」という顔をして、面目^{めんぼく}なさげに頭を掻く。

「まあ、いいさ。一緒に行こう」

ファヌルスが馬車の扉を開けると、イチゴは満面の笑みを浮かべながらファヌルスの後に続いた。

城を出た馬車は街中を抜け、街外れへ進んでいく。目指すのは、空に浮かぶ巨大な岩山のような物体だ。近づくにつれて、徐々にその全貌^{ぜんぼう}が見えてくる。

それは丁度深皿に似た形状をしていた。遠目では分かりにくいのだが、徐々にそれが岩と土で出

来た島だと分かる。

馬車が暫く進むと、いくつかの建築物が目に入ってきた。近くには、様々な木箱や布袋などが積み上げられた集積場がある。その周りでは軍服を着込んだ者達が忙しそうに動き回っていた。

建物群のうち、大きな倉庫のようなひととき目立つ建物が島から少し離れた位置に建っていた。しかし、それがただの倉庫でないことは、一目見て判断できるだろう。なにしろ、建物の中から延びたケーブルが、空に浮かぶ島と繋がっているのだ。ケーブルには、大きな箱型の物体——ゴンドラが吊り下げられており、ゆっくりと上昇していく。まるでロープウェイのようだった。

つまり、その建物は空に浮かぶ島と地上を繋ぐ、ロープウェイの駅の役目を果たしていた。

ファヌルスとイチゴを乗せた馬車は、駅の近くに停車した。ほかにもいくつか馬車や馬が停められていることから、そこは馬繋場らしい。

二人は馬車を操っていた御者に礼を言うと駅の入口に向かう。

島の底辺は、地上から二十メートルばかり離れていた。ケーブルが繋がっているのは、島の中ほどの部分だ。高い位置なので、ケーブルの角度もかなり急だった。

駅の隣には、沢山の木箱が積み上げられていた。それらは島に運び込まれる予定の物資であった。このロープウェイは物資運搬の目的で作られたものなのだ。

「これは、ファヌルス様！ お越しでしたか！」

忙しそうに働いていた軍人の一人が声をかけた。服につけられた装飾から、かなり高い地位の人

物のようだ。ファヌルスがにっこりと笑顔を返すと、その軍人は小走りに近づいて来た。

「運び込みは順調に進んでいます。ただ、量が多いもので、手間取ってはいますが」

「ご苦労おかけします。皆さんが頑張ってくれてはおかげで作業も順調なようですし、助かりますよ。やはり軍隊の方々は、規律正しく仕事が早い」

「恐縮です。そうだ、そろそろ御出でになるころだろうと、ニコ殿がお待ちかねですよ」

軍人の言葉に、ファヌルスは驚いた顔をする。

「彼女は、上に居るかと思っただんですが。下りて来てたんですか？」

「荷物を運び込む順番の確認のために、ね」

その声は、ファヌルスの後ろからかかった。振り返ると、そこには黒髪ショートヘアの少女が立っていた。軍服を着た可愛らしい顔立ちの、イチゴと同じ日本人である。

「やあ、ニコ。忙しそうだね」

ショートヘアの少女ニコは、大げさな仕草で肩を竦める。

「ああ、大変さ。なにしろ運び込む荷物の量が多いのに、一度に運べる量が限られているからね。上で使う効率も考えなくてはいけないから、余計に面倒だよ。これで軍隊の人達が居なかったらと思うと、冷や汗が出てくるね」

「はっはっは！ お役に立てているようで、光栄です」

ニコの言葉に、軍人がおかしそうに笑う。

本来、荷物を運ぶだけなら軍人が出てくる場面ではない。労働者などを雇えば済む話だろう。だが、運び込む場所があまりに特殊だ。

なにしろ、空に浮かぶ島である。

一般の労働力を使うわけにもいかない。荷物自体に特殊なものが含まれてもいる。

ファヌルスに声をかけた軍人は、別の軍人に呼ばれその場を離れた。

作業中の軍人や職人達の邪魔にならない場所に移動し、ファヌルスとイチゴ、ニコは、改めて挨拶を交わす。

「イチゴ、仕事を投げ出して来ただろう。トヨカさんが怒ってたよ」

「あー、やっぱりバレたかあー」

面白そうに言うニコの言葉に、イチゴはがつくりと肩を落とす。どうやらイチゴは、任された仕事から抜け出してファヌルスを迎えに行ったようだ。

項垂れるイチゴを見て、ファヌルスとニコは声を出して笑う。

「ところで、ニコ。荷物の方はどんな具合かな」

「うん。予定通りだよ。とはいっても、物がものだからね。苦労はしているよ」

ニコは、島に運び込まれる荷物の管理を任されていた。品物の種類も量も多いので、大変な仕事だがよくこなしている。雑貨や食料といった日用品から、剣や弓といった武器、防具、兵器の類、さらには魔法道具までと多岐にわたる。

これらは、リアブリュック公爵家が用意したものだけではない。貴族や王族、あるいは商人、商會など、様々なところから集められた品々だった。

「でも、島を完成させるには必要だからね。やりがいはあるよ」

ニコは空に浮かぶ島へ目を向けた。

それらはすべて、島を空中要塞として「完成」させるための資材なのだ。ファヌルスはそんなニコの様子を見て、少しだけ表情を曇らせた。

「すまないね。君の仕事は島の警備なのに、こんなことまで任せて」

「なに言ってるのさ。コレも、君達を守る仕事には違いないよ」

ニコがこの世界に来た経緯は、イチゴとほとんど同じであった。普通に暮らしていたはずなのに、気がついたら森の中を彷徨っていたのである。ただイチゴと違ったのは、最初に出会ったのが人間ではなく、魔獣だったところだ。

森の中を歩き回るニコは、人里に出る前に小型の魔獣に出くわした。小型とはいえ、相手は見たこともない化け物だ。日本で平和に暮らしていたニコにとっては、尋常でない恐怖だった。

森の中を必死で逃げ回ったのだが、人間が魔獣を振り切れるはずもない。助かったのは、たまたまファヌルス達が、その周辺の魔獣を討伐している最中だったからである。

そのときファヌルス達は、イチゴの能力により五感と体を魔法で強化して森の中を進んでいたのだという。それゆえニコの叫び声を感じて、ニコが魔獣に食いつかれる前に駆けつけられたの

だった。

目の前で口を開けていた魔獣を、切り捨ててくれたファヌルスが居なかったら。そのファヌルスを能力で強化してくれていた、イチゴが居なかったら。

ニコは生きてなかっただろう。

だから今度は、自分が二人を守らなければならない。そう、ニコは考えていた。幸いにして、ニコがこの世界に来て手に入れた能力は、その目的に適ったものだった。「武器召喚」という名のそれは、剣や弓、銃火器などの武器を召喚できるというものだ。その銃は特殊なものであり、コウシロウが使っている魔石弾丸同様、この世界でも十二分に威力を発揮するらしい。

自らの能力を知ったとき、ニコは大いに歓喜した。

戦うための力として、これほど便利なものもない。

ニコが召喚した銃火器は、もの見事に魔獣を打ち倒した。圧倒的な射程や破壊力は、魔法を使うような凶悪な魔獣にも有効だったのである。

それを駆使して今度は自分が、ファヌルス達を。大切なものを、守る。

それが今のニコにとって、最も重要な使命なのだ。この仕事もその一環なのである。

ニコはファヌルス達の方を振り返って、にっこりと微笑んだ。

「二人とも、上に行くんだらう？ 搬入のリストも渡し終えたし、僕も一緒に行くよ。イチゴが逃げないように、見張らないといけないしね」

「うー。お仕事きちんと終わらせていったのにいー」

唇を尖らせるイチゴを見て、ファヌルスはニコの方へ顔を向ける。

その意味を察したのか、ニコが頷く。

イチゴは、確かに自分の役目は果たしていたのだ。だが、先ほどから話題に上がっているトヨカは、非常に仕事に厳しい人物であった。仕事を終わらせたなら、すぐに次に取り掛かれ、というタイプなのである。どちらかというとお気楽なイチゴは、よく彼女に怒られていた。

とはいえ、仲が悪いというわけではない。

ファヌルスは手を伸ばし、イチゴの頭を撫でる。

「大丈夫だよ。迎えに来るように私が頼んだんだ、って言うておくから」

「ホント!? それなら怒られないで済むかも!」

とたんに、イチゴは嬉しそうに表情を輝かせる。

コロコロと変わるイチゴの顔に、ファヌルスとニコは少し呆れたように笑うのであった。

3 島を歩く男

空に浮かぶ島からは、三本のケーブルが延びていた。

それらはすべて地上にある同じ駅と繋がっており、ひっきりなしにゴンドラが行き来している。ゴンドラが駅に着くと、すぐに積荷を兵士達が下ろしていく。人は乗っておらず、中にあるのは空箱あきばこなどのゴミの類だけだ。それらを下ろし終えたら、兵士達は今度は物資を載せていく。きびきびと積み込んでいく姿は、流石軍人さすがといったところだろうか。ゴンドラはかなり大きく、人ならば二十人以上は乗れるだろう。積載量せきさいりょうの許容限度にも余裕があり、安定性も申し分ないらしい。もともと、兵士達は大雑把おろおろに物資を載せているわけではない。

ゴンドラは、その天井部分に取り付けられたハンガーと呼ばれる柱一本でケーブルにぶら下がっている。そのため前後左右の重さのバランスが崩れると、ゴンドラ全体が傾いてしまうのだ。そうなる中での積荷も崩れるし、下手をすればゴンドラがケーブルから外れてしまう。このような事故を防ぐ目的で、荷物の重さを上手く調整する必要がある。

兵士達は無造作に詰め込んでいるように見えたが、実は載せる荷物やその位置などには細かな配慮はかりがあった。だから、急にやって来た人間達を乗せるスペースを作るのに、少し時間がかかるのだ。そこでファナルス、イチゴ、ニコの三人は、自分達が乗れるゴンドラが来るまで、駅の中で待つことにした。

駅と言っても、ケーブルを支える装置と予備のゴンドラ、そしてゴンドラに積み込む荷物と、島から下ろされたゴミの類が積み上げられただけの簡素な建物だ。休憩するための施設などはなく、中はがらんとしている。大きな倉庫の壁の一面がないような状態だった。その壁のない部分から、

空に浮かぶ島へ繋がるケーブルが延びているわけだ。

三人は駅の壁際に置かれた椅子に、のんびりと座っていた。

すでに兵士達には頼みであるので、余裕が出来れば声をかけてくれることになっている。本来なら、荷物よりも貴族のファナルスを優先するのが当たり前だろう。だが、ファナルスはそういったことに頓着とんちやくのない人物であったので、今は自分達よりも荷物を運ぶことの方が大事だと考えていた。わざわざ物資を運び上げてまで島で行っている作業は、それだけ重要なものなのである。

「それにしても」

近くに置いてあった予備のゴンドラを見上げ、ニコがポツリと言葉を漏らす。

「ロープウェイって、普通はケーブルが動くものだよな？ それでゴンドラの方が動くんだから。魔法道具まほうどうぐって凄いよね」

ここでは地球のロープウェイとは、まったく違う原理が使われていた。ケーブルの方は固定してあり、ゴンドラが自らの動力で動くのだ。

ニコにも詳しい原理は分からなかったが、動力が魔法道具なのは知っていた。実際に、それを工房で製作している場面も見たことがある。とはいえ本当に、ただ目にしたことがあるというだけだ。原理も仕組みも不明だが、使うことはできる、というところだろうか。

そんなニコの言葉に、イチゴは真剣な面持ちおもむで頷く。

「そうなんだよねえー！ 不思議な道具おもしろって沢山あるんだよね！ 使い方が分からないけどさー」